

- 一、神職招魂詞
- 一、献饌
- 一、齋主祭文ヲ奏ス
- 一、委員長祭文
- 一、來賓祭詞
- 一、玉串拜禮
- 一、一同拜禮
- 一、頌德唱歌
- 一、撒饌
- 一、神職還魂詞
- 一、委員長閉式ノ辞
- 一、一同敬禮(風琴調節)
- 一、齋主以下一同退場
- 三 表彰式順序
- 一、午前十一時半一同着席
- 一、一同敬禮

- 一、開式ノ辞
- 一、君ガ代唱歌合唱二回
- 一、戊申詔書奉讀
- 一、奉答唱歌全唱
- 一、窮民救助ニ關スル賞狀傳達
- 一、納稅優良部落表彰
- 一、村長式辞
- 一、來賓祝詞
- 一、受賞者總代答詞
- 一、閉式ノ辞
- 一、一同敬禮
- 右畢ツテ講演會開會
- 來賓 峰師範學校長 志賀杵築中學校教諭 永松壯三郎氏 重光直愿氏 福田郡視學
- 南部各町村長 南部各小學校長
- 參列員 西武藏校兒童 村内一般人士

四 齋主祭文

此乃神離爾招奉里坐世奉留贈從四位梅園三浦翁乃靈前爾齋主神職野田力謹美豆白左久汝翁波世爾變無支物知人爾坐世里志賀此乃里爾生禮出坐志々波此上無久辱支幸爾奈毛故冀爾此乃郡乃教育乃會人等思此起志且與都城乃御前爾御祭仕開奉里豆御德乎欽比奉里仰支奉里計禮波翁乃美名波久方乃雲井乃上爾聞衣上里豆畏支邊與里從四位天布高支位乎贈里給開里支然禮波又會員等波記念願德碑乎立梅園全集乎編美梅園文庫乎設計豆翁乃學乃力乃廣久多加里志事乎世爾普久知其令米計禮故爾爰爾此乃里人乃有志等相謀里豆此乃四月三十日波志毛翁乃身亡世坐志奴留日奈禮波今日乎吉日止撰比定米豆年並乃御祭仕開奉留止各毛各毛御前爾參里集比來豆御食御酒種々乃味都物乎机代爾置支高成志豆次々爾拜美奉里禮比奉里將翁乃御德乎願米奉里爾開奉留狀乎平計久安計久聞食世止白須如此仕開奉留爾依里豆今志世乃中開計行久隨爾人乃心波薄久成里行波惡志久成里行計留乎翁賀爾世爾伊坐志々時乃如御靈乍其爾厚久成里善久成里行久可守里王比幸開給開止齋主力山管乃根乃懇爾爾奉其久止白須

五 委員長祭文

度ムテ贈從四位三浦梅園先生ノ靈ヲ祭ル
願フニ先生稀代ノ英才ナリ以テ宏深ノ學術ヲ究メ遂ニ萬有ノ理ヲ發揮シ道德ノ根本ヲ示シ經世ノ大道ヲ明カニシ後進ヲ啓發セラレタル如キハ忠孝ヲ以テ立國ノ大道トナスノ我邦ニ於テ千古不磨ノ識見ニシテ後人豐後聖人ト稱スル亦所以ナキニ非サル也茲ニ恒例ニヨリ祭典ヲ行ヒ恭シク

報德ノ誠ヲ諭ス在天ノ靈來リ饗ケヨ

大正八年四月三十日

西武藏村長 小野 元 次

六 來賓祭詞

學山ノ麓學溪ノ邊老モ若キモ校門ニ集ヒ閭村業ヲ休ミテ追敬ノ誠ヲ諭スアリ 是毎年四月三十日梅園祭當日ノ光景ナリト聞ク嗚呼偉ナル哉 願フニ先生易簣セラレテ茲ニ百三十有餘年星移リ 歲變ルコト妙カラズト雖モ碩學懿德愈々現ハレ景仰ノ念益々厚キチ加フ蓋シ學德高ク學界ニ貢獻シ世道人心ヲ啓沃シタルコトノ尋常ナラザル賜タラスンバアラス嗚呼コノ地ニ此ノ人エル哉不肖任ニコノ地ニ來リコノ式典ニ遭遇シ感慨更ニコ切ナルヲ覺ユ茲ニ恭シク微忱ヲ陳ブ

大正八年四月三十日

東國東郡長 正七位勳七等 宇都宮 喜 六
東國東郡教育會長

茲に大正八年四月卅日大分縣立梓葉中學校長柴山槐郎謹みて尊師三浦梅園先生の神靈にもの曰さく先生が詩人として文章家として哲學家として數學家としてはた又美術家として郷土皇國のために盡されにし其の功績と實行以て人を導き給ひにし崇高なる人格とを偲ひ奉れば百余年の

今日猶目のあたり先生に接するの心地なんせらるゝ勞をしも厭ひ給はす身をしも生死の外に於かれ塞々匪窮誠をつくして龍の腮を撫で虎の尾を踏む事の苛き譬を更に憂しとも思召し給はす研讀倦ます實に一世の典型を示されし事後の世の鑑とやせん幼にして先生綱索先生の門に入り給ふや日々經を抱きて往復するに常に跣足たりしときぬ鳴呼茲に至れば吾人は只に先生を追慕するのみに止まらず慙愧度々至りて措く能はざるものあり彫刻に繪畫に天文に總て精密なる研究と努力とを重ねられし跡鳴呼先生は生前已に神なりしには非ざるか二子山の雄姿國東川の清冽今に猶其かみを語るに似たるかな茲に謹みて先生の靈を祭らんとすうれしとも聞召し給へ

七 講

(文責記者ニアリ)

(一) 梅園先生ニ因ミテ

峰師範學校長

冬ハ寒ク夏ハ暑クアリマス、丁度只今が時候ガヨクアリマス、今頃ノ心地ノヨイノハ青葉若葉ガ生々トシテ居ルカラヨイノデアリマス、小學兒童ガ其ノ通りデ活々トシテ居ルカラヨクアリ亦大切デアリマス、今日ハ生徒ニ對シオ話セウト思ヒマス、梅園先生ニハ大學ノ博士方モ感心シテ居リマス、梅園先生ガ今日マデ名高イノモ少イ時カラ學問ニ御熱心デアッタカラデアリマス、皆サンモ勉強セネバナリマセン。恐レ多イ事ナガラ 天皇陛下モ御幼少ノ御頃ニハ學習院

デ大層御學問ニ御勉強遊バサレタノデアリマスカラ皆サンナドハ尙更勉強セネバナリマセヌ、物見遊山ナドノ爲ニ學校ヲ休ンデハイケマセヌ、學習院ノ教場デハ皇族方ノ御勉強中ハ腰掛ハ木製デアリマシタ。然ルニ女學校アタリデ腰掛ノ上ニ風呂敷敷チシイタリハンケチシイタリシテ居リマス、男子マデモソナ意氣地ノナイ人ガアリマスガ其レハ恥ヅベキ事デアリマス。梅園先生ハ華美贅澤ヲ忌マレ質素デアリマシタ、栢葉ニ洗足デ行カレタ事ハ其ノ一デアリマス。只今ハオ金ガフエマシタ、之ハヨイ事デアリマスガ華美ニナルト困リマス、近來贅澤ハ日々増シテ來テ居リマス、此ノ贅澤ハ不知不識ノ間ニナルモノデ何時ヨリナルカワカリマセヌ、或ル人が煙草入ノ根ベニ玉ヲ着ケテ見マシタガ根ベダケガ余リ立派デモ不似合トイフノデ袋ヲ替ヘマシタ、マダ似合ヌトイフノデキセルヲ替ヘ遂ニ煙草入マデ替ヘマシタ。着物デモ其ノ通りデ帶ノ上等ヲ買フタガ着物ガ似合ヌトイフノデ終ニハ絹ノ衣物ヲ買フ様ニナリマス。

此ノ様ニ漸々華美ニナルモノデアリマス、梅園先生ハ諸候ヨリ聘セラレヤウトシマシタガ此ノ村此ノ家業ヲ去ラナカツタノデアリマス、今ハ田舎ノ人モ都會熱ニ驅ラレテ大切ノ家ヲ忘レテ出ル人ガアリマス、之ニツイテ面白イ話ガアリマス。或ル石工ガ毎日石ヲコツ／＼ヤツテ井マシタガ仰デオ日様ヲ見ルトキラ／＼ト光ツテ井マス石工ハオ日様ハ偉イナト感テオ日様ニナリタイモノデアルト見テキマスト雲ガ出テ其中ニ隠レマシタ雲ガエライ雲ニナリタイト見テ井マスト風ガサツト吹イテ吹キ散ラシマシタ風ノ方ガエライ風ニナリタイト見テ井ルト大風吹キ

來リテ木ノ枝ヲ吹キ折ラシマシタ然シ石ハ動キマセンデシタ石ガ偉イト思ヒ石ニナラウト思ヒマシタガマテ其ノ偉イ石ヲ打チ壞ス石工ノ方ガ偉イ石工ガ一バン偉イ〜是ダ〜ト氣ヲ落チツカセマシタ、氣ヲ轉ズル事ハワルクアリマス。

梅園先生ノ學徳ガ今日迄輝イテキルノハ先生ノ御精神ノ美デアツタカラデアリマス、人間ハ心ガ大切デス、眞心デス眞心デナクテハナリマセヌ己ノ心ガ誠デアリマシタラ鬼モ蛇モアリマセヌ之ニツイテ善イ教ヘ草ガアリマス、或ル所ニ嫁チ邪慳ニスル姑ガアリマシタ、嫁ハ辛イ日チ送ツテキマシタガ遂ニ考ヘテ姑チ無キモノニセウトシマシタ心易イ醫師ノ家ニ行キ事ヲ話シ毒藥ヲ貰ハウトシマシタ處ガ醫師ノ曰フニハ今ハ惡イ今若シ姑ガ死ンダラ疑ハ嫁ニ掛リ自分モ罪ニカ、ルコトニナル、今ノ惡イ世間ノ噂チ改メテヨクセナケレバナラヌ、嘘カラ出テ誠デモヨイカラ親切ニスルガヨイト話サレマシタ、嫁ハ歸ツテ誠チ盡クシテキマシタ、處ガ惡イ姑モ嫁ノ親切ニ感テ善クナリ眞實ノ親子ノ様ニ仲ヨクナリマシタ、噂ハ前ト反對ニ善クナリマシタ、或ル日道デ醫師ニ出會ヒマシタ、醫師ガ近頃大ブン噂ガヨクナツタカラ毒藥ハドウデスカト尋ヌルト嫁ハ赤面シテ事ヲ語リ説ヒマシタ、實ハ醫師ノ取リ計ヒデ大イニ共ニ喜ビマシタ眞心チ以テ人ニ交レバ必ズ間違ハアリマセヌ、次ニ仲ヨクセネバナリマセヌ、下級生チ愛セネバナリマセヌ、腕力チ用ヒタリシイチメ運動場ハ丸デ喧嘩場ノ如ナ所ガアリマスガソレハイケマセヌ

此ノ村ハ第一期ヨリ第二期第三四期ト村長ノ更迭セヌノハ村民ノ提携和衷デアツテ誠ニ結構ナコトト感テキマス、此ノ村此ノ學校ハ益々發展スルコトト思ヒマス。以上ハ梅園先生ニ深ク感テ其一端ヲ話シタワケデアリマス。

(二) 努力

志賀杵築中學校教諭

私ハ今日コノ三浦梅園先生ニ因縁アル土地ニ參リ、ソノ莊嚴ナル式ニ參列シ、何トモイヘヌ靈感ニ打タレマシタ。カノ偉人ガ踏メル土ヲ蹈ミ、飲メル水チ飲メル皆様ニ對シマシテ、貧弱ナル私ハ満足ナル話チスルコトハ出來マセヌ、マシテ梅園先生ノ御事蹟等ニツキマシテハ尙更ノコトデアリマス。

私ハ嘗テ梅園集チ讀ミマシテ、先生ガ僅カ十六才ノ時、毎日々々山ヲ越エテ杵築マデ經テ手ニシテ通ハレテキタトイフコトヲ見マシテ、深ク感テマシタ。ソノ上出ル時ハ杵築ノ町ニテハ草履チ用ヒマスガ、山道ハ跣足ニテ行カレタトアリマス、其努力、其儉素、私ハアル一種ノ靈感ニ打タレマシテ其人格ノ偉大サハ誠ニ生ナガラノ神デハナイカト思ヒマシタ。此偉人傑士ノ後々チ追フテ呱呱ノ聲チ上ゲラレタル人々ハ確ニ大ナル感化チ受ケルコトト思ヒマス、其實ニ梅園先生ノ一生ハ努力デアリマシタ、ソレデ私ハ努力トイフコトニツイテ話サウト思ヒマス。

今カラ三十年程前ニ伊勢ノ國松阪ニ小林正吉トイフ貧シキ一農夫ガアリマシタ、七十才ニナル老母ト、妻シヅトノ間ニ十才ニナル正三郎ト妹ニオハワオツコト都合六人ノ家族デアリマシタ、正吉ハ到ツテ勤勉ダスケレドモ、ドウモ赤貧洗フガ如クデ活計ノ道ガ立チマセマ、收支ガ償ヒマセマ、ドウトカ工夫セバト妻ト相談イタシマシテ、都會地ニ出ラント色々談合シマシテ終ニ東京ニ出マシタ、大度高樓軒ヲ並ニ電燈瓦斯燈目チ眩セシメ晝チアザムクバカリ、彼等ハ世ノ文化ニ一驚ヲ喫シツ、モ長屋ノ一隅ヲ借りテ佗シク生活ヲ始メマシタ何チセンカチセント考ヘルニ世ノ進歩ハ田舎人ノ取ツク仕事ヲ見ツケ出サナイ、ソノ中ニ持ツテ來タ少シバカリノ金ハナクナルシ、其日ノ生活ニ差支ヘルヤウニナリマシタ、ソコデ詮ナクモ賃車引ヲ始メマシタ、之ハ車主カラ人力車ヲ借り一日四拾錢宛ノ借賃ヲ支拂フノデス、毎日々々朝ハ薄暮カラ夜ハ星ヲ戴イテカヘルヤウニ努力シマシタガ、車賃ヲ支拂ツテカラ後ハ母親ヲ養フノガヤウニデアリマシタ。

或日長男ノ正三郎ガ學校カラ歸ツテ來テ雨ノ如ク涙ヲ兩頬カラ流シテ泣キマス、日頃温和デ喧嘩ナドスル子デハナイノデ、母親ガイロ／＼ニ聞キタマスガ默シテ言ハナイ、叱リツ、スカシツ或ハナダメツシテ聞キマス、學校ニ拾五錢ノ授業料ガ納メラナイノデ明日ヨリ學校ニ行ケナイ、ケドモ子供心ニモ親思ヒノ彼ハ自分ノ内ノ今ノ狀態ヲヨク知ツテキル、ソレデ親ニ心配チカケマイトイハナカツタ、其子供心ノイザラシサニ母モソノロニ可愛サウニ思ハレテ共ニ

泣イタ、ソシテ妻ノシズハ疲レテ歸ツタ、夫正吉ノバツチチヌイデ之ヲ質屋ニ持チ行キ貳拾五錢チカリ出シ拾五錢ヲ愛子ノ授業料ニ拾錢ヲ老母ヘ牛乳ヲ買ツテ歸リマシタ。

アル希望ト慈愛ノ心ニ當メル妻ハ心ノ光ヲ認トメツ、疲レタル夫ニ夜車引キニト頼ミマシタ、ケレド規則ガヤカマシクテバツチガナケレバ出レヌ、ソコテ妻ハ一計ヲ按テ古硯箱チ出シテ夫ノ脚ヲ染メマシタ、笑ツテ妻ノスルコトヲ見テキタ夫ノソノ笑顔ハマタ淋シイ笑デアリマシタ親ガ如何ニ艱難シテ子ヲ育テルカガ分カリマス、私ハ時々夜更ケテ寢床ニ親ノ恩ヲ沁々感ワテ泣クコトガ度々アリマス、親子ノ情愛ハ誠ニ一点ノ濁リモアリマセマ、國ノタメ、村ノタメ、學校ノタメトイヒマシテモ何カ利益ヲ思フモノデスガ親子ノ愛丈ハ別デアリマス、大正五年軍隊ニ在ル時、私ハ母危篤ノ電報ヲ受ケ取りマシテ歸リマシタ、病ミサヲホヒタル母ハ床ノ中カラ出テ來テ、見エヌカラ手ヲ握ツテ、オ、肥エタ、太ツタト喜ンデクレマシタ、自分ガ身ノ病モ忘レテ、母ガ子ヲ育テル様ヲ見マス誠ニ

はへば立て、立てば歩めの親心

我身にせまる老を忘れて

ノ私歌ノ通りデアリマス、學校ニ行ケバ人ニマケヌ様ト思フ私ハ或ル運動會デ一人ノ貧シイ女ガ聯合体操ノ際ニ仕事着ノマ、出デ來テ、先生待ツテ下サイ私方ノ運動シヤツガ今出來マシタ、ト幾百ノ中ニ唯一人着物ヲ着テキタ子供ニシヤツチキセテ、イフニイハレヌ歡喜ニ滿チタ顔

十二
シテ見テキルノチ見マシタ、紀實之ガ

人の親の心は闇にあらねども

子を思ふ道に迷ひぬる哉

親子ノ愛ハ理屈デハアリマセヌ、ソレデ親ノ慈愛ヲ感謝セネバナリマセヌ。

正三郎ハ子供ナガラ親ヲ思フチキタ、學校カラカヘルト新聞賣リヲナシ其實上チ父母ヘアゲテ父母ノ喜ブ顔ヲ見テ喜デ非マシタ。

梅園先生ハ日ニ三度墓參サレタトアリマス。卷チ手ニシテ勉強シツ、孝道ヲツクシタトイヒマス。

正吉モ常ニ歸リニハ魚ヲ買ツテカヘリテ母ヲ喜バセセ常ニ母ニハ澤山儲ケタト偽チイツテ親ノ心ヲ喜バセテキマシタ、之虚偽デスケレドモ虚偽デナイ其誠心ハ人心ヲ將又鬼神ヲナカシメマス。

鬼神も泣かすものは目に見えぬ

人の心の誠なりけり

佛モ神モ誠心ニハ泣クモノダ。

正吉夫婦ノ至誠ハ鬼神ヲナカシムルモノガアリマシタ。

母ノタメト子ノタメニ出シタ貳拾五錢、バツチモハカズニ夜車引キソレハ寒イノ夜デアリマス。

シタ、毛布ヲカアツテ提灯ヲ勝ニ入レテ兩國橋ノ袂ニ客待チシテ非マシタ、寒キ夜ノ通ル人モ稀デ、ダン／＼ト更ケテ大方ノ車屋ハ皆カヘリマシタガ、正吉ハドウニカシテ貳拾五錢ヲ得シト待ツテ非マスト十一時頃火ガ見エテ一人來マシタ、ヤレ嬉シヤ天ノ授我チ扶ケカト授ケラレシヤト近ヨルチ見レバ一人ノ夜警ノ巡查デアツタ、「モウ客ハナイ歸レ」トイフ、モヤ／＼シテル正吉チ見ルヤ急ニアラ／＼シク本署マデ來イトイフ、イロ／＼オ詫ビシテモ聞キ入レナイ、巡查ハ墨デカイタバツチチ見テ叱リツケル、イロ／＼オコトハリセシガ正吉ノ至誠見エテカ、一滴ノ涙ハ其巡查チ感ゼシメ、正吉チユルシ立去ラントセシガフリカヘリテ

「めくるばと氷るひまなき水車かな」

「かせぐに追ひつく貧乏なし」

「正直の頭に神宿る」

ノ三ツノ格言チ教ヘ、ボケツトヨリ貳拾五錢出シテ與ヘマシタ、正吉ハ再三再四辭シマシタガ終ニ辭スル道ナク之チ貰ヒマシタ、コノ三ツノ格言ハ正吉ガ一生ノ燈明臺デアリマシタ。

巡查ト別レテ二時ニ垂ントスル頃カヘルト、宅デハマダ細キ燈火ノチラ／＼ト話聲ガシテ非マス、妻ノシヅハ正三郎ト共ニ寢ズニ待ツテキマシタ。夫婦ノ不和ハ貧乏ノ基デ夫婦ノ和合ハ家ヲ興スモノデス。ケレドモ近頃妻チ先ニシテ父母チ後廻シニスル者ガアリマス、之ハ誠ニヨクナイコトデ、オ勸語ニチヤント其順序チオ示ニナツテオリマス。

正吉ハソレヨリ、彼ノ三條ヲ守リ本尊ト心得テ賃金ヲ食ラス然モ正直ニ働キマシタガ、アル雪交リノ雨フル日、一人ノ壯士ヲ乗セテ一里半程引キマシタ、ソシテアル大キナル宿ノ大門ニ兩宿ヲシテキルトハ都合ヨシト六十余ナル白髯ヲ蓄ヘタル身分アル人ガ宿カラ出テ來テ乗リマシタ。多クノ見送ノ女ドモ一瞥ヲ與ヘ御前様ト呼バルハ其人ハ車上ヨリ僅ニ廻町二丁目ト云ツタバカリダス。間モナク挽キ行キテ門ニ到レバ其御前様ハソノマ、奥ヘ入リマシタ、ソシテ近藤トイフ書生ガ出テ來テ無理ニ五圓クレマシタ、喜ンデノ歸リ道フト火ガ消エタノデ車上ヲ搜スト、世ニモ類ナキ立派ナカバンガアリマシタ、開イテ見ルト八百圓ノ金ガ入ツテキマス、惜シト思ヒマシタガ忽チ彼正吉ノ頭ニハ電ノ如ク「正直の頭に神宿る」トイフ句ガ閃キマシタ。早速カヘシニ行キマシタ、モウ夜ノ十二時頃ダス、呼鈴ニ驚キ近藤出テ見ルト正吉ノカバンヲ持參セルナリ、其主人ハ時ノ内閣總理大臣黒田清隆公デアリマシタ。其金ヨリモ大切ナル書類ノ入リアリシヲ大ニ喜バレ、先ツ當座ノ禮ニト百圓送りマシタ、ダガ正吉ハ理ニアラズト受取マセシ、清隆公ハ其至誠ニ深ク感マシタ。高キモ卑キモ心ノ誠ハ全クコトダス、正吉ガ歸リツイタハハ二時頃デシタ。妻モ正三郎モ例ノ如ク起キテ待ツテキマシタ。ソノ話ヲ聞イテ妻ハ余リノ夫ノ馬鹿正直ニ腹ヲ立テ、井マシタ。翌日ニナリテ再ビ夫婦デ口論シテ井ル所ニ、黒田公ハ近藤ヲツレテ來テ五百圓ヲ送りマシタガ正吉ハ頑トシテ理ニアラズト受取りマセンデシタ、然ラバ何カ望ミニテモト云ハレタノデ久シク賃車ヒイテ老母ニ心配サスルガ心モトナイ、

ナルナラ自分ノ車ナ一台惜シイト申シマシタ。公ハ彼ノ廉潔ト孝心ニ感マシテ百台ノ俸ヲ求メ、公ノ邸宅ノ傍ニ居ヲ構ヘサセ、車主トナリテ今モ暖カキ生活ヲシテ井ルトノコトマス。之ハ一ツノ事實談ダスガ、考ヘテ見ルトニ馬鹿正直ニ働クコトハ宇宙ノ真理ダト思ヒマス、世ノ萬物ハスベテ活動シテ井ル、雨ガ降ラウガ風ガ吹カウガ太陽ハ決シテ東ニ出デ西ニ入ルコトヲ止メマセヌ。人間モ宇宙ノ一分子ダカラ活動セネバナリマセヌ、食フ爲ニ働クノデナクテ働クタメニ食フノデナクテハナリマセヌ。三浦梅園先生ノ一生ガ努力ヲモツテ通サレタ事ハ申シ上ゲマシタヤウダスガ、此村ニ呱々ノ聲ヲ上ゲタル人々ハ、此ノ先生ノ大人格ヲ承受セチバナラヌト思ヒマス、ソレニハ努力ガ大切ダトイフコトヲ申シマシタノデス。了

(三) 實 行

永松壯三郎氏講演

私は本年七十三歳になりました。梅園祭に參るのも今年が終だらうと思ひまして、思ひ立つた様な次第であります。それで講演などといふ譯ではないが、お話も是が最後かと考へますので、一言申上げて見ようと思ふのであります。

それは實行といふことであります。物事は實行が第一で、この實行によつてこゝろ始めて値打が

出るであります。ここに梅園先生の御教訓の一つ二つをお話して、お互に實行して行きたいと思ひます。固より梅園先生は古今の大偉人、吾々は極々の小人に過ぎないから、とても先生の通りになることは及びもないことであるが、併し一つでもよい似ることは出来ぬものだらうかと思ふのであります。来る道々私はこんな歌をよみました。

學びなばあどか似ざらんとも人よ

うしも人にてありけるものを

といふのであります。之は御相談ですが一つでもよい實行は出来ぬものでせうか、それには先づ志を立てねばならぬ、其の志たるや、よし身は卑くとも志す所は高くなければならぬ、それについて、梅園先生は極めて謙遜な方であられたが志は非常に高く持たれてゐました。富坂先生に送られた書翰の一節へも「條理を取つて天地を大讓するに於て肩古人より卑きを不覺候」とありまして、當に舜何人ぞの意氣が見えて居ります。道を行くには、この先生の意氣を本として、昔の聖人賢人に比較して進みたいものであります。私の歌もろこを詠んだ積であります。又梅園拾葉の中に手野村貞平の行狀を稱讃して「人を禽獸との相ざる事いくばくもなし只慈愛廉恥の心を失ふと、失はざるこの間なり、慈愛廉恥即仁義の心なり。此の心を存する時子としては親に孝に、臣としては忠に、父としては慈に、君としては恵に、衆にあつては争はず。……只愛を押し恥をしるの心こそ彼になくして我に有するものならめ。其禽獸になくし

て人のみは獨有するものを持ちながら、其心すまなば、自己禽獸の域におちいるものといふべし」とあります。貞平は家は赤貧洗ふが如く、身は啜といふ不具者でありながら、老いたる母と、病める姉との奉養至らぬ限もなく、見るもの感せぬはなかつたのであります。遂に守の聞く所となり賞せられました。前のか二人の先生も孝行についてお話がありましたが、實に孝行は人間徳行の大本であります。又檢校録に孝子赤星新六郎のことが書いてあります。父赤星統家は筑後柳川に居城を構へてゐた蒲池鎮並の妻の兄でありました。勢やむことを得ずして、嫡子新六郎といつて十四歳になるのを、肥前佐賀の龍造寺隆信に質に遣はしました。處が龍造寺は赤星の心をあやしむことあり、肥筑の界なる竹中原に新六郎を引出し、はりつけにかけました。其時武士どもが「今ぞ最後なるを念佛申せ西に向けん」と申しますと、新六郎は

我面西には向けろ赤星の

親にうしろをむけじとおもへば

と一具の和歌を詠じて刑に就いたといふことであります。儼に十四歳の少年であります。死ぬが死ぬまで孝行の一念を貫いて居ります。之で話はやめることに致しますが、要するに私の考はこんな梅園祭などを行つて先生の御遺徳を追慕すること共に、一事でもよいから實行する様にしたいといふのであります。

梅園先生の學風は新日本の學界にも珍重されて其學徳を仰慕する人益々多きを加ふるに至りまして既に梅園會なるものが組織され年々其追遠會が開催され今日日本の教育界にても先生を徳川時代先賢中の有數なる人物と認め先生が南豊の山中に隱者として世を終られたにも關らず江戸京阪の鴻儒と並び稱しまして其學徳を推稱して措かざるのでありますかくの如く今日の學界より評判のよい學者は此の九州にても澤山はあります、蓋し吾が梅園先生の如きは第一位を占むる方であつて實に鎮西學界の寶といつてよいと信じます。

梅園會にては先年既に「梅園全集」を發刊されました先生的全著述を纏めて世に公にされ當時學界の渴望を醫し學者を裨益されました、是れ何よりも慶賀すべきことであります。私が私の望望の念は今後梅園會から「梅園先生書簡集」といふ様な題目で先生の尺牘を世に公にされんことを熱望してやみません、若し梅園會の諸彦が盡力されまして私の希望を容れてくださるゝならばそれによりて先生の公私生涯を詳に鮮に知得し欣喜の情に堪へ得ざるものは私一人でもありますまい。

日本の儒者の詩文集は其尺牘集の代理ともいふべきものでありますけれども私は眞の尺牘集即

ち假名交文の尺牘を集めたものが從來多く出版されて居るのを此上なく遺憾に思ひます。其人の尺牘によりて其生涯の眞諦を能く知り得ることは今更事新しく私が説明する必要はないと思ひます。

梅園先生の學識徳操の外に其故舊との間に往復された尺牘を爲し得る範圍内でよいから早く發表することは大に肝要なことと深く信じています。

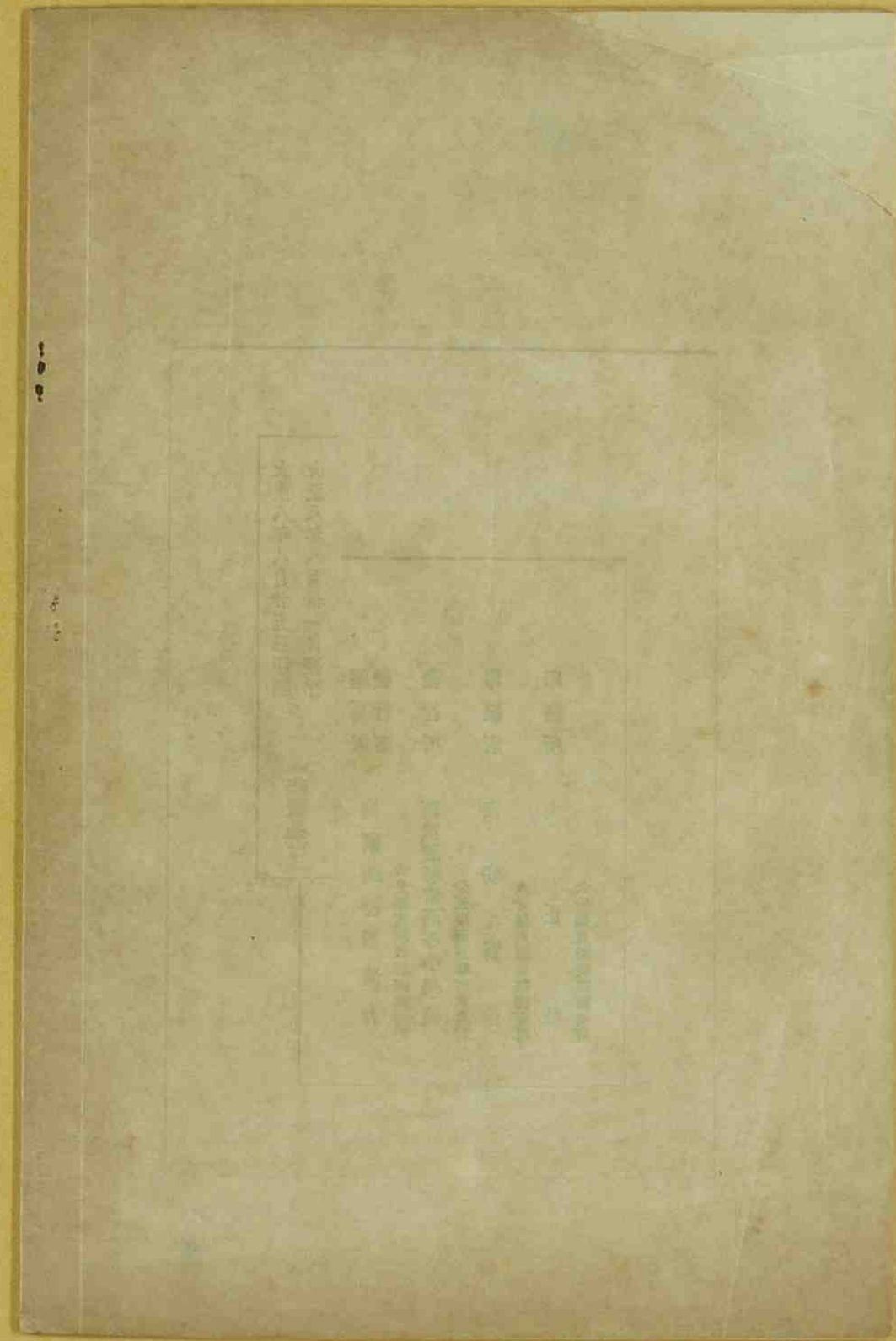
大正八年八月廿五日印刷
大正八年八月卅一日發行

（非賣品）

編纂者 梅園頌德講演會
發行所 西武藏尋常高等小學校

印刷者 宗安實作
印刷所 大正社

大分縣東國東郡東町
大分縣東國東郡東町



長崎大学附属図書館経済学部分館 武藤文庫所蔵

